

# 「憎くては 叩かぬものぞ 笹の雪」



## 社会福祉功労

やまもと ひろやす  
山本 博康氏

平成 16 年 5 月に

北多摩西地区保護司会国立分区分  
保護司として委嘱されて以来、今日まで  
犯罪者の更生、犯罪の予防、青少年の健全育  
成等に努められている。

～保護司とは～  
犯罪や非行をした人たちが処分を受けた後  
に地域社会に復帰するにあたり、再犯を防ぎ  
立ち直りを助けるため、更生保護活動  
を行う非常勤国家公務員です。

―保護司になったきっかけを教えてください。

国立第三中学校、国立第一中学校のPTA会長や東地区育成会の役員をやっていたことから、先輩の保護司が推薦してくれたことがきっかけです。保護司は社会的信用が不可欠な職種なので、公募より推薦が一般的かもしれませんが。

―保護司のやりがいとは何ですか。

やはり、非行に走った青少年が更生されて社会に出ていくことは大きなやりがいとなっています。更生の必要な青少年は、接し方次第で再犯する可能性があります。ですが誠心誠意指導したことが通じ、きちんと更生されれば、つまずいた経験も社会貢献の糧となるのです。

―青少年が健全に育つためには何が必要と考えていますか。

目標を持つこと。目標がないと、刹那的な感情に流され、擦れてしまう傾向にあります。それは小中学校においては特に、知識を積むこと

上に重要だと考えています。

また、青少年の成長を支える人の存在が必要となります。特に、非行に走った青少年が立ち直るには、自分自身の努力だけでは難しく、周りの協力が不可欠です。まずなにより家族の方が青少年のそばにいてあげること。成長過程の青少年が孤独にならないよう、周囲にいる人たちで適切な環境をつくってあげることが望ましいです。

―更生の必要な青少年と接するときには、どのようなことを意識していますか。

保護司として意識していることは、犯罪を犯した当事者とその周りの人との関係性が深まるように訴えかけることです。

たとえば、「きみが罪を犯す事によって、きみの親・兄弟にも迷惑がかかってしまう。でも最終的にきみを助けてくれるのは親・兄弟しかいない。きみは一人じゃないのだから、自分の行動はしっかり考え見極めて行わないといけない」と言うのです。そうすることで、当事者にとって家族とは掛け替えのない存在であると

いう事を、そして家族の方には自分たちが当事者を支える唯一の存在である事を理解してもらおうのです。

青少年が非行に走る理由に、心の繋がりがありません。私の呼びかけが家族と繋がるきっかけになればと思っています。

―現状の社会における課題について、教えてください。

更生した人を受け入れる体制がまだきちんと確立されていないことが問題です。更生しても働き口がないと、再び非行に走ってしまう。このような社会であってはなりません。

この課題をなくすためには、非行に走った人たちに、社会が愛情を持って接することが大切です。「憎くては 叩かぬものぞ 笹の雪」という故事があります。雪の重みで笹の葉が押しつぶされそうになっているかわいそうと叩いて雪を払ってあげると、笹は自らの力で跳ねるように起き上がる。非行に走った人とは、この笹の葉のような存在です。たとえ厳しく叱ることがあっても、愛情がきちんと伝われば、再び起き上がって成長できるのです。